日本古典文學大系38

御伽草子

市古貞次 校注

岩波書店刊行

御伽草子　　日本古典文学大系38

昭和33年7月5日　第1刷　発行　©　　定価650円

校注者　市古貞次（いちこ ていじ）

発行者　東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3　岩波雄二郎

印刷者　東京都青梅市根ケ布385　山田一雄

発行所　東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3　株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

日本古典文学大系
別巻総索引
引換券
（御伽草子）

全66巻御購入の方に限り有効．完結次第この引換券を切りとり，御購入書店へお渡し下さい．総索引を贈呈．

岩波書店

目次

解説……五
凡例……二三
文正さうし……二九
鉢かづき……五八
小町草紙……八六
御曹子島渡……一〇二
唐糸さうし……一二四
木幡狐……一四八
七草草紙……一六一
猿源氏草紙……一六五

物くさ太郎……一八七
さゞれいし……二〇八
蛤の草紙……二二二
小敦盛……二三九
二十四孝……二四一
梵天国……二六五
のせ猿さうし……二六九
猫のさうし……二九七
浜出草紙……三〇七
和泉式部……三二二
一寸法師……三二九
さいき……三三七
浦嶋太郎……三三七
横笛草紙……三四六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

酒呑童子……三六一
福富長者物語……三八五
あきみち……三九四
熊野の御本地のさうし……四一一
三人法師……四三四
秋夜長物語……四六〇
補注……四八六

解説

一　御伽草子の範囲について

室町時代から江戸時代の初めにかけて、数多くの短篇の物語草子が作られている。それらは写本で残って居り、絵巻物・奈良絵本のものが多いが、恐らく三百篇以上に上るであろう。江戸時代に入って、それらの中のあるものは絵入板本として板行され流布したが、江戸時代の中期ごろまでの間に、書肆が二十三篇を選んで、同じ体裁で、御伽文庫または御伽草子と名づけて板行したものがある。

文正さうし(三冊)　鉢かづき(三冊)　小町草紙(二冊)　御曹子島渡(二冊)　唐糸さうし(二冊)　木幡狐(二冊)　七草草紙(一冊)　猿源氏草紙(二冊)　物くさ太郎(二冊)　さゞれいし(一冊)　蛤の草紙(二冊)　小敦盛(二冊)　二十四孝(二冊)　梵天国(三冊)　のせ猿さうし(一冊)　猫のさうし(一冊)　浜出草紙(一冊)　和泉式部(一冊)　一寸法師(一冊)　さいき(一冊)　浦嶋太郎(一冊)　横笛草紙(一冊)　酒呑童子(二冊)

この叢書の御伽草子は、奈良絵本を摸した絵入横板本であって、その古雅な体裁と内容とがよく釣り合っていて子女の読み物としてふさわしいと考えられたために、多くの人々に歓迎され、何版かを重ねたようである。その初板年月を明らかにしないが、寛文年間あるいはそれよりも多少溯るころの板行であろうか。現在残っているものには、酒呑童子の終りに「大坂心斎橋順慶町　書林　渋川清右衛門」と刊記を記したものがある。この揃い本はもと右に示したように三

十九冊であったが、のちに作品ごとに合綴して二十三冊としたものがあり、その方が流布した。これを御伽草子または御伽文庫とよんだことは群書一覧等の記述によって知られるが、渋川称觥堂柏原屋清右衛門の出板書目に、「御伽文庫（にしへのおもしろき草紙をこと〳〵くあつむ）箱入廿三冊」とあり、浅井竜章堂蔵版書目に「祝言御伽文庫　箱入全部二十三冊、一名御伽草紙　中古草子を集たる書なり」などとあることによって一そう明らかであろう。現存する揃い本で箱入のものは少いが、ただ一つ岡山大学付属図書館池田文庫蔵のものは、箱入三十九冊の揃い本であって、箱の蓋の中央に「御伽文庫」と印刷した題簽を付し、その蓋の裏にはやはり印刷した書名目録が貼りつけてある。（岡山大学教授、藤井駿氏の御教示による）。

こうして三十九冊あるいは二十三冊の叢書として、御伽草子は江戸時代に板行されたものであり、分売もされたように思われるが、やがて江戸時代後期には、二十三篇に類した作品も御伽草子と間々よばれることがあったらしい。明治時代には新編御伽草子も出版され、大正以後には大体、室町時代の短篇小説の汎称と認められるようになっている。

御伽草子には、このように広狭二義があり、これが現在も並んで行われているようである。本書では、そこでまず狭義の御伽草子である前掲二十三篇を、御伽草子板本によって収め、さらにそれ以外の注目すべき作品として、福富長者物語・あきみち・熊野の御本地のさうし・三人法師・秋夜長物語の五篇を付載することにした。

二　御伽草子の内容と特色

広義の御伽草子、すなわち室町時代から江戸初期にかけて作られた物語草子の大体について、以下に若干、解説を加えることにしよう。

御伽草子を一体どんな人が書き、誰がこれを読んだかということについては、多少資料があるけれども、大部分の作

品については、ほとんど明らかでない。平安時代・鎌倉時代に作られた物語の作者は、もちろん公家階級に属する人々であったと思われるが、御伽草子の中には、公家以外の人々、僧侶や武家や隠遁者その他によって書かれたものもかなりあるのではないかと思われる。室町後期になっては、町人などの手に成ったものもあったであろう。これを読んだ人々も、かつての物語文学のように少数の人々に限られていたのではなかった。限られた人々への読み物であることを目ざして書かれたのではなく、かなり多くの読者を予想して執筆されたもののようである。

簡単な年表を繰りひろげて見ても、すぐ分るように、御伽草子の時代すなわち南北朝から江戸時代初期までのおよそ三百年は、南北両朝の対立・抗争をはじめとして、応仁の乱・戦国時代を経て、関が原の戦に至るまで、全国各地に戦の絶え間のない不幸な時期であった。日本の歴史上稀に見る動乱期であったといってよい。そういう混乱のうちに、中央の公家は全くその勢威を失い、花の都は時に焼土と化し、貴重な古来の文化財の湮滅するものも少くなかった。それに反比例して地方の豪族が著しく擡頭したのであって、下剋上は当時の流行語であるが、それはまたこの時代の社会・文芸などあらゆる面に見られるものであった。それはことばをかえて言えば、在来の低い階級に属した人々の社会的地位なり日常生活なりの上昇を示しているのであるが、それに伴って、彼等も文学の読者・享受者の一員に加わることになったのは当然である。そういう新しい読者の要望にこたえて、作られたのが御伽草子であったのである。そうしてこのような教養の比較的低い、新しい読者を目ざして書かれたということは、当然かつての物語と様々な面で違ったものでなければならなかったという結果を生んでいる。もちろん新しい読者は物語文学にもあこがれをもち、これを家に備え、読もうと心がけたが、それは多くの場合難解であり、彼等とは全く異なった世界の物語であって、決して親近感を以て接することができなかった。必ずしも心から楽しむことはできなかったのである。そのような物語は古典文学とし

て尊ばれ、飾られはしたけれども、彼等がどの程度これを鑑賞し得たかは頗る疑わしいといわなければならぬ。むしろそういうものと同時に、いなそれよりもさらに安易に楽しめるような読み物が切望されたのではないか。新しい読者のそういう要求を満たすものとして、御伽草子は生れ出たのであった。

それ故、これまでの物語では、公家の生活する京都を中心として、特に宮廷及び公家の邸宅において、話が進行するのがふつうであったが、これに対して御伽草子では、都は依然としてあこがれの的でもあったから、もちろん描かれているが、ほかに地方を舞台とする作品が少くない。地方と都とを結んだ作品もしばしば見られるのである。登場人物にしても、物語ではほとんど公家に限られていたが、ここではそのような限定はなく、武家や僧侶や農民などその他あらゆる階層に及んでいるし、動植物などを擬人化した作品もかなりある。時代も、神代から当時にわたるというありさまである。内容・性質に関しても同様であって、かつての恋愛中心の物語から抜け出して、復讐談・怪異談・立身成功談や笑話等々、すこぶる多種多様である。こういうことは、御伽草子が物語文学の流れを承けついでいるだけでなく、軍記物や説話集や昔話・伝説など、あらゆる先行文学を手当り次第に読み物に仕立てようとしたこととも関係があろう。

御伽草子は、右のように、多種多様な作品を含んでいるが、一面すこぶる類型的であるということも否定できない。文章についてみると、慣用される語彙やきまり文句というべきものがあるし、風景や人間の描写なども、型にはまった表現をとる場合が少くない。全体の筋にも、定ったいくつかの型があった。このような類型性は、軍記物語のような語り物や説話文学に見られるところであるし、幸若舞曲や謡曲・狂言でも指摘され得ることであって、おしなべて中世文学に通ずる性格だといえるであろう。御伽草子の場合、そのような説話の類型に着目して、数百の作品を分類することも可能であるし、またそうすることが御伽草子の概略を知るに便宜でもあろう。明治以後、長谷川福平・平出鏗二郎・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

藤岡作太郎・佐成謙太郎・島津久基・野村八良等の諸家によって、さまざまな分類が試みられているが、ここではそれらを参照しながら、㈠公家に関するもの、㈡僧侶・宗教に関するもの、㈢武家に関するもの、㈣庶民に関するもの、㈤外国に関するもの、㈥異類に関するもの、というように六つに先ず類別して、その性質内容を簡単に説明しておこう。（本大系に収めた作品には＊を付しておいた）。

㈠　鎌倉時代の物語の系列をひく　(1)公家の恋愛物は室町時代に入っても、相変らず作り出された。「忍音物語」「若草物語」「しぐれ」などがそれであって、鎌倉期の擬古物語の改作と認められるものがしばしば存する。かつそれらには男女相思の仲が破れて、悲恋遁世に終るものが多い。そうして源氏物語の影響が相変らず著しいが、全体として物語の分量が短くなり、筋本位となり簡易化されている点に、相違が認められる。また落窪物語・住吉物語の系列をひく　(2)継子物も、「小落窪」（落窪の草紙）「岩屋草紙」「ふせやの物語」「秋月物語」「一本菊」など書かれているが、継母の継子に対する迫害がどぎつくなり、継子いじめそのことよりも、その結果生ずる継子の流浪に相当の紙数がさかれるようになった。これらの継子物にも、やはり鎌倉時代にすでに存した物語の改作と認められるものがあるが、住吉物語がすでにそうであるように、当時語り伝えられた民間説話の影響があろうかと推測される。そうしてそういう民間説話を主材として作られたのが、「鉢*かづき」「花世の姫」「うばかは」であろう。それらにはもはや公家物語の色どりは全く無く、地方の物語という感じが強いが、これらの諸作は地方の人々にも昔話としてなじまれて来たものであるだけに、後々まで広く愛読された。中で、「鉢かづき」が最も有名である。

一方、伊勢物語などの歌物語から展開した和歌的説話を脚色した作品もある。平安朝の名歌に示唆を得て一篇を構成したものであるが、そのような作品と極めて近い作品に、和歌を織り交えながらある歌人の伝説を物語るものがある。これらを併せて、(3)歌物語、歌人伝説物と名づけることができよう。「あま物語」や「小町草紙」「和泉式部」「琴腹」「西行」などがそれであるが、「小*町草紙」は古今集序や小町物の謡曲などを多く引いて、一篇をなした作品であって、この種の作品の典型的なものということがで

きる。「和泉式部」も道命と式部との恋物語で、前代の説話等にその源泉をさぐることもできるが、紫式部、和泉式部、小式部を母子三代とする「小式部」などと共に歌人伝説の奇想天外な発展を示して興味が深い。

(二)　中世は仏教が栄えた時代であったから、文芸にもその侵染は著しく、むしろ仏教をぬきにしては中世文学を語り得ないといってよいくらいである。それ故、室町時代には僧侶の生活を主題とした作品が種々現れている。(1)児物語は、僧侶と児との愛欲を描いたもので、「秋の夜の長物語」「あしびき」「幻夢物語」「松帆浦物語」「鳥部山物語」「嵯峨物語」「辨の草紙」「花みつ」など、すぐれた作品が少くない。中で前三者は、絵巻物として残って居り、「秋の夜の長物語」は山門と寺門、「あしびき」は南都北嶺の拮抗を背景にした、この時代屈指の雄篇であって、僧侶の手に成ったことは明らかである。かつ「秋の夜の長物語」には、絵巻物のほか、永和三年(一三七七)奥書の高乗勲氏蔵本や、嘉吉二年(一四四二)本奥書の大東急記念文庫や東大図書館南葵文庫などの古写本がある。また児物語のほかに(2)破戒僧の失敗談を記した「おようの尼」や「さゝやき竹」もある。前者は愛すべきコント風な作品であり、後者は昔話から、取材したかに思われる滑稽な話である。

この時代には出家遁世した者が頗る多かった。隠遁生活と文学とは、切っても切り離せない関係にあるが、そういう出家遁世して草庵に入る動機・事情などを主題とした作品を(3)発心遁世談といい、またそういう遁世の由来が、出家後懺悔の形式で語り出される場合に、特にこれを懺悔物とよぶ。「三人法師」(三人懺悔冊子・三人僧)「高野物語」「くるま僧」(松姫物語)「さいき」「朽木桜」などがこれに属するが、それらの中で、「三人法師」は高野山に修行する三人の出家の発心由来談、南北朝時代を背景にとり、その構想も巧みであって、当代作品中、白眉として推すべきものである。また「さいき」は佐伯某と京の女と国の女との三角関係という「藍染川」その他の作品と類似の題材を扱いながら、国の女のいさぎよい性格を描いて居り、特異な点をもった佳作であった。なお物語の最後を遁世に結ぶ作品は、他の作品にも公家の恋愛物が悲恋遁世物であることをはじめとして、ほかにも非常に多いのであって、物語の終りは、「めでたし」かもしくは「遁世」であるといってもよいほどであるが、そういう所にも時代相が窺われるであろう。

以上のような僧侶の生活を描いた作品のほかに、宗教家が特に深い関係をもっていたものに、(4)本地物がある。これは、ある種の僧侶が唱道した説教文学から出たもので、一種の宗教小説とよんでもよいかもしれない。本地物ということばは、本地垂迹説から出ていることはいうまでもないが、その語義は広狭さまざまに解釈されて居り、諸家の説く所は必ずしも一致していない。本地物は、もと仏の本生談から発したもののようで、大体、神仏の前生もしくは神仏の人間時代を説いたものであり、さらに寺社の縁起や、高僧等が悟りを開くに至る経緯を述べた伝記などをも□□の本地と名づけることがある。こういう本地物は、「阿弥陀の本地」「毘沙門の本地」「月日の御本地」(月みつの草子)「愛宕地蔵物語」(愛宕の御本地)「熊野の本地」「厳島の本地」「諏訪の本地」「梵天国」など数十篇を数えるが、それぞれに概して異本が多く、その流布した状況を物語っている。これらの本地物と密接な交渉をもっているのは、神道集であって、多分説経者流の民間に語りかけたものから、それは生れたのであろう。神仏の人間時代の苦難を物語ることに重点が置かれ、惨酷醜怪な場面もあって、頗る荒唐無稽な内容の物語であるが、しかし、もともと民衆と深く広く結びついたある種の宗教家が、素朴な民衆に語って聞かせた口承的な文芸を草子化し台本化し、絵本仕立にしたものであり、恐らく広い享受者層を擁した物語であろうと推測されるのであって、その意義は決して低くない。その素材の探究や流布・伝播の状況などは、今後の研究に俟つべき点が多いであろう。熊野は中世宗教の重要な拠点の一であるが、その熊野の権現の由来を語ったのが、「熊野の本地」であって、その流布も著しかったが、内容から見ても本地物の代表作と認むべき作である。また「梵天国」も難題説話や異郷遍歴談を含んで居って、筋の変化に富み童話味ゆたかな佳作であった。

(三) 鎌倉時代に成立した軍記物語について見ると、南北朝の末に太平記が出たが、その後は相次ぐ内乱、戦争を描いた軍記が夥しく書かれたけれども、特筆すべき作品は現れなかった。これに代って英雄伝記物語、あるいは准軍記物ともいうべき曾我物語・義経記が作られた。そういう英雄伝説に取材する傾向は、謡曲や幸若舞曲にも見られるが、御伽草子にあっても、武人伝説物とよぶべき一群の作品が現れた。軍記物語のもつ軍記的・実録的性質と物語的・ロマン的性質とが分裂して、前者は明徳記・応仁記・結城戦場物語等の軍記となり、後者は武家に関する小説にと移っていったと見ることができるかもしれない。何にしても、こ

れらの武家の小説が、主として軍記物語の系統をひくものであることは、異論のないところであろう。そういう伝説物としてはまず(1)怪物退治談があり、その主人公は大体平安時代の英雄である。源頼光及びその四天王等が活躍するものに、「酒呑童子」(大江山絵詞・伊吹山絵詞という異本がある。また酒呑童子の生い立ちに関する異伝を述べた作に伊吹童子という作品もある)「土蜘蛛草子」「羅生門」があり、その他、藤原秀郷の武勇を記した「俵藤太物語」、坂上田村麿・藤原利仁等を寄せ集めた「田村草子」などがある。次には(2)源平時代の伝説に取材した作品がある。平家関係では、「横笛草紙」「小敦盛」があり、木曾義仲関係では「唐糸草紙」「清水冠者」があるが、何といっても義経に関する作品が、「御曹子島渡り」「浄瑠璃物語」「秀衡入」「皆鶴」「判官物語」など圧倒的に多い。「唐糸草紙」は、唐糸の娘、万寿の孝行談であり、その舞技によって母を救うという技芸(芸能)成功談でもあって、異彩を放っている。「横笛草紙」は平家物語・源平盛衰記等で知られた滝口入道と横笛との悲恋を独立させたもので、後代への影響も少くなかった。「小敦盛」は敦盛の遺子が、父の行方を尋ねて一の谷に至り、一夜父の亡霊に逢うという構想で能の幽霊物と近い性質の作である。なお「浜出草紙」は、書肆が幸若舞曲の台本を御伽文庫に収めたものであるが、頼朝時代の一こまを語った祝儀物である。

右は、歴史上、有名な実在の人物に付会した伝説に取材したものであるが、これらとは別に地方の豪族の争いを描いた(3)御家騒動・復讐談とも名づけるべき一群の作品がある。「もろかど物語」「むらまつの物語」「明石の三郎」「堀江物語」などがそれで、多くは地方に語り伝えられた伝説に取材したものかと想像される。主人公が悪人のために窮地に陥り、壮烈な戦が行われ、一旦惨敗するが、やがて主人公は神仏の加護をも蒙って悪人に報復をとげてめでたしめでたしに終るという風な筋書のものが多い。武勇談・復讐談であり、邪恋や御家横領や諸国遍歴などが絡み合って居り、勧善懲悪思想が濃厚であるが、同様な話はまた古浄瑠璃としても行われているのであって、恐らく室町後期の武士の間に好まれた読み物であったと想像される。なお妻の貞操を犠牲にして敵討を成就したという悲劇を扱った特異な作品に「あきみち」がある。同じ話は浅井了意の「日本廿四孝」(大倭廿四孝)にも採られているが、当時の敵討の一面を抉った作品として注目すべき作である。

(四) これまでに述べて来た公家・僧侶・武家の何れにも属せしめ難い者、すなわち、農民・商人・町人その他を便宜的に庶民の名で一括しておきたい。そういう人々を扱った作品はそれほど多くはないが、庶民階級の勃興しつつあった世相の反映が見られるものとして、かつまた小説の世界に新風を吹き入れたものとして、大切な意味を有っているのである。狭義の「御伽草子」にはこの類に入れられるものが比較的多いが、そういうところにも、次代にまで持ち続けられるような内容をもっていたことが知られるであろう。この類には (1)笑話・寓話とよぶべき性質をもった作品が多いが、「福富草子」「常盤の嫗」「鏡破翁絵詞」(鏡男絵巻)「音なし草子」「火桶の草紙」などがその主なものとしてあげられよう。「福富草子」は、妙心寺春浦院に国宝の絵巻があって有名であるが、それには多く登場人物のことばが記されていて、地の文と認むべきものは一箇所あるにすぎない。つまり一々の絵の説明文が、絵と絵との間に詞書として挿まれるのではなく、画面に書き込まれた、絵を補うことば(せりふ)のみで、話が展開してゆくのである。こうした様式は、絵解を連想させるものがあり、重要な問題をはらんでいるが、これとは別に「福富長者物語」あるいは「福富草子」「福富物語」とよばれる作品がある。これもまた絵巻物として伝存しているが、これには地の文も詞書として絵と絵との間に介在していて、ふつうの物語になっている。前者では「高向の秀武が道祖神に祈誓して鈴を授けられ、尻から妙音を発する術を会得し、諸方に招かれて、その技芸を演じ一躍富み栄える。隣の七条の坊の刀禰福富の妻がこれを羨んで、夫に勧めて高向の許に弟子入させる。福富は高向から秘法を授けられ、貴人の邸に赴いて教の通り演じたが失敗する」というのであったが、後者では、福富織部が放屁の術に成功し、幸を得たのを、隣の乏少の藤太の妻が羨んで、夫をそそのかして弟子入させ、前者と同様に失敗するのである。初めに神に祈ることがなく、福富という人名も反対になっているが、前者の後半と後者とは非常によく似ているので、両者が密接な交渉をもつことは疑いがない。多分前者から後者が生れたのであろうが、後者の成立もやはり室町時代であろう。本大系には、後者を収めた。(2)恋愛・求婚談には、「物くさ太郎」、「一寸法師」、「猿源氏草紙」がある。三篇ともに「御伽草子」に収められているが、前二者は立身成功談でもあり、最後にはそれぞれ公家であることが分り、また神となって現れている。そういう (3)立身出世談(致富成功談)としてはほかに「梅津長者物語」「大悦物語」などもあるが、代表的な作品は、「文正草子」で

あろう。御伽文庫二十三篇中の第一に据えられた作品であり、柳亭種彦の「用捨箱」には江戸時代初期には、冊子の読初に女子がこれを用いたと記されている。無名の一平民文正が製塩業に成功して巨万の富を得、その娘は姉が関白の若君の北の方、妹が后となり、文正自身も一躍大納言となるというのであるから、めでたずくめの話であって、いかにも民家の正月の読初にふさわしかったと思われる。これらの庶民の小説には、下剋上の時代を背景とする庶民的精神の盛り上りが認められるけれども、同時に彼等の希求する最後のものは、富であると同時に、いなそれよりもむしろ前時代的な公家貴族への昇格にほかならなかったし、都へのあこがれをも捨て切れなかったことをも示している。そうして彼等はしばしば仏となり神となって現れるのであるが、そういうところに、西鶴などの作品とは違った中世というわくがはめられていたことを見のがしてはならないであろう。

なおこの類に属する作品には、「文正草子」をはじめとして、「めでたし」という語が頗る頻繁に用いられていることも注意すべきであって、(4)祝儀物という性質を兼ねているものが少くないが、そういう祝儀物に属する作品も「笠間長者鶴亀物語」「松竹物語」など幾篇か存した。「七草草紙」は中国の孝行談であり、「さゞれ石」はさざれ石の宮の話であるが、共に長寿延命、若返りのめでたい物語であって、祝儀物ともいうことのできる作品である。

(五) 外国に舞台をとった作品には、「楊貴妃物語」「二十四孝」「還城楽物語」など中国関係のものと、「類至長者」「法妙童子」「宝満長者」「蛤の草紙」などのインド関係のものとがある。「二十四孝」は、二十四孝詩選の詩を掲げ、その文に基いて、それぞれの説話を述べたもので、一種の翻訳文学というべきものである。「蛤の草紙」もしじらの孝行談であるが、蛤の中から現れた女が彼と契を結ぶのであって、怪婚談ともいうことができる。なお外国を舞台とする作品は、ほかにも本地物などに少くなかったことを付記しておく。

(六) 異類というのは、人間と類を異にするもの、すなわち人間以外の生物・無生物をさしている。動植物や器具などをいうのである。そういう異類を主人公とした小説を異類物とよぶことがあるが、それは、異類を人間同様に描くのであり、人間に擬しているのであるから、また擬人物とも名づけられている。こういう異類の擬人説話ははやく上代に行われ、三宝絵詞によると、そうい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com